

山岳部の思い出

三中32回 熊谷俊夫

毎年、夏休みには、山、海それぞれの自由参加による訓練が行われていたが、体操部に入っていたのであまり関心がなかったところ、四年生になって（昭和十四年）、鞍馬から北へ山を越えて、若狭湾に至る企画に参加したのがきっかけで、山岳部に入り、山に魅せられてしまった。部といつても、はっきりとした組織があるわけではなく、何となく好きな者が集まって、随時小グループで、計画実行し、相互に情報交換するという具合であった。部室は水泳プールの下に作られてあり、テントその他の道具がおかれていた。テント他山中泊の用具を担ぐ大型リュックサックも部品であった。

京都市の北西には校歌に名を出す愛宕山、北東には比叡山があり、その中間の真北、加茂川の上流奥深くに北山といわれる山群がある。貴船神社の奥の芹生峠を越えると保津川の上流になり、少し下がって又上がって峠を越えると由良川の水源地帯

に、花脊峠をこえると安曇川の上流になり、下がって上がって峠を越えると、また保津川或いは由良川の上流になるというように山と峠と谷が複雑に入り組んでいて、地図を便りに沢を上がり、稜線に至ると藪こぎをして頂上に至り三角点を確認するというのが常道であり、また当時はバス路線が少なく、今では日帰りできるコースでも、週末を利用してテントで一泊というのが多かったから、山登りの基本を体得するのに適した環境であつたと思う。

京都府には、一〇〇〇メートルを超える山はなく、九〇〇メートルを越えるのが、西から愛宕山、雲取山、峰床、皆子山である。測量の起点となる三角点を設置するために山道が作られたが間もなく笹で覆われてしまっていて、愛宕山を除き藪こぎが大変であるので、早春の残雪の上を歩いて登るのも一つの方法とされ、最高峰の皆子山は、そうして登った。当時ケーブルカーもついた愛宕山の続きには、地藏岳があり、冬はスキー場になり山スキーのようなこともできた。

若狭湾に向かうのに、憩いの場となるのが、京大の演習林の基地である。由良川の上流に囲まれ、農閑期の牛の放牧場があり、小屋の設備も整っていて、別天地に来了感があつた。滋賀県、湖西の比良山系は千メートルを越える一段上位の山であつたが、登山道や山小屋が整備され、趣を異にした。冬山の真似

こともした。

湖東の鈴鹿山系も部としては守備範囲であったが、私は未知のままである、その他、目標の一つに岐阜県と福井県の県境にある冠山があり、そこにも二名で挑戦した。冠の形をした岩山で、怖い思いを何度かしたが無事登頂達成。麓の溪谷も、山畑も美しかった。炊事に使った湧き水の美味しさは、格別であった。ガソリンが不足して、バスの燃料は木炭で、坂道でエンジンを起こし、乗客が降りて後押しをするという時代であった。

時代を語るものとして、も一つ。前記の早春の皆子山登頂の続きで、三日目に廃村八丁（標高六、七百メートル）に一泊した帰途、峠に向かう道の脇に朝鮮人の家族が住む、藁葺き小屋の住宅群があり、赤子を背負った婦人達が朝餉の片付けをしていた。噂で知っていたが、近くにマンガン鉱の鉱山があり、朝鮮の人達が採掘の仕事をしていたのである。かつて入植した日本人が大雪のため撤退して、廃村の名が付いたところである。声を飲み込んで急いで通り越した。戦後昭和四十年頃ある雑誌の、この仕事に従事した人の記事で、当時朝鮮の人達が集団で請け負ったことで、まあまあ稼ぎになったという事を知ってホッとしたものだ。思い出を語れば切りがない。この辺で。